

## 性格特性からみた女性の独立意識

Women's Awareness of Independence Examined from Viewpoint of Personality Traits

三田 英二

Eiji MITA

### I. 問題

本研究は、女性の自己形成を検討する一環として、独立意識を性格特性からどのように説明できるかを検討することが目的である。

従来の自己形成理論は男性中心に構築されてきたもので、女性の発達過程に適合しない（高橋・柏木，1995）、特にEriksonの自我同一性理論は女性になじまない（山本，1988；桑原，1990；三枚，1998）と指摘されている。

伊藤（1992）は、自己受容にも社会規範による評価次元（自分自身を社会的に“良い”と評価する受容）と、個人的基準による感覚次元（自分で自分のことを“好き”と感じられる受容）という2つの自己受容のスタイルがあるとし、この観点から自己受容を中学生・高校生・大学生を対象に発達の検討を行った。その結果、全体的な自己受容の発達過程として、男性は中学から高校段階にかけて高い自己受容を維持するが大学で低下し、女性は中学から高校では自己受容のレベルは低い大学で自己受容は高まる結果を得た。そして、男女とも高校から大学への移行期に大きく変化し、男性は受容→自己否定化、女性は自己否定→受容化という逆傾向を示すという自己受容発達において性差があることを指摘した。そして、自己受容のスタイルによる性格の分化過程は、男性は直線的であり、女性は複雑な過程を示すことを示唆している。

多少概念的には異なるが、中学1年から大学4年まで自我同一性形成という発達の観点から検討した田端（1980）も、男女とも高校2年生まで同一性得点は下降傾向を示すが、その後は異なった形成過程を示し、男性においては自我同一性達成を目指して真しぐらに進むのに対し、女性は男性のような直線的な自我同一性達成を目指した姿が見られないと述べている。

山本・松井・山成（1982）は、性差の観点から、男性の場合、自己の内面的な資質と自己評価が強く結びついていること、女性は対人的な側面や社会的属性などの自己の外面的側面が重要なものとなっていることを示した。

従来の心理発達理論は、依存から独立を目指す発達過程が主流であった。このような発達過程は、安定した児童期から思春期に至ると、いわゆる疾風怒濤といわれる青年期を迎える。この段階に入ると自己嫌悪に陥り、その結果、自己の内面的な資質の充実を図るため自己の再構成を迫られる。このため、いったんは児童期の自己を否定する。そして、再生していく自己を

徐々に社会に馴染ませていながら、自己確立をなしていくという、V字型の発達過程を示すことを意味している。これに対し、女性はV字型の発達過程を示さず、自己の内的資質よりも対人的な側面や社会的属性を重視するため、複雑な過程を歩むことになる。このことは、男性の発達現存の理論から導き出される過程と生態的にも一致することが多いが、女性はそうではないことを示唆する。

このように女性の自己形成過程は男性とは異なる。また、上述のように、従来の自己形成理論は、男性中心に構築されてきたという指摘がある。では、自己形成上重要な女性の独立意識とはどのようなものなのか、検討していく必要がある。

ところで、性格とは、社会適応を考える上での重要な概念である。「一般に人の行動の背後にあって、特徴的な行動の仕方、考え方を生み出し続けている態度の総体」(教育心理学新辞典第8版、金子書房、1978)と定義される。いわば、現実場面でどのような行動をとるかということは、個人の性格特性がどのような状態にあるかに依存すると考えられてきている。

本研究では、この現実場面での行動の内的準拠軸となる性格を説明変数とし、独立意識にどのような影響を与えてくるか、また、女性の独立意識は性格特性からどのように説明できるかを検討することが目的である。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

青年期の終焉は延長されてきているという指摘がある。このため、調査対象者は、女子学生90名(平均年齢19.18歳、SD=.76、range 18-21)だけでなく、本来の区分でいけば成人期前期にあたる女性73名(平均年齢25.12歳、SD=1.96、range 22-29)も含めた計163名とした。全体での平均年齢は、21.86歳(SD=3.29)である。

### 2. 用具

#### (1) 独立意識の測定

加藤・高木(1980)の独立意識尺度を用いた。分析にあたっては三田(2003)が因子分析した結果を用いる。第1因子「自己決断力」(項目4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 35, 36), 第2因子「親への依存」(項目20, 21, 22, 23, 24, 25, 27, 33), 第3因子「時間的展望の拡散(「展望拡散」と略記)」(項目3, 13, 14), 第4因子「反抗期心理」(項目28, 30, 31, 37), 第5因子「自信の欠如による親への服従(「親への服従」と略記)」(項目17, 18, 26, 29, 34)の5因子が抽出されている。

#### (2) 性格特性の測定

市販されているYG性格検査を用いた。

## III. 結果

三田(2003)が行った独立意識尺度の因子分析で抽出されている5因子を目的変数とし、YG性格検査の12の下位因子を説明変数として、重回帰分析を行った。重回帰式で得られた標

準偏回帰係数を重相関係数、決定係数とともにTable 1に示す。

分散分析の結果は、目的変数「親への依存」で有意傾向にとどまったが、その他の目的変数では、すべて有意であった。

標準偏回帰係数が有意であった説明変数は、「自己決断力」を目的変数としたとき、「劣等感大」(t=-4.537,p<.001)、「非協調的」(t=-2.823,p<.01)、「攻撃的」(t=2.394,p<.05)、「思考的外向」(t=-2.456,p<.05)であった。同様に、目的変数「親への依存」では、「非協調的」(t=2.017,p<.05)、また「のんき」(t=1.953,p<.10)、「社会的外向」(t=-1.718,p<.10)では有意傾向が見られた。目的変数「展望拡散」では、「抑うつ性大」(t=2.787,p<.01)、「主観的」(t=-2.681,p<.01)、有意傾向が見られたのは、「神経質」(t=1.839,p<.10)であった。目的変数「反抗期心理」では、「攻撃的」(t=3.183,p<.005)、「活動的」(t=-2.971,p<.005)、「のんき」(t=2.201,p<.05)が有意であった。目的変数「親への服従」で有意な説明変数となったのは、「神経質」(T=2.002,P<.05)、「のんき」(t=-2.310,p<.05)、有意傾向が見られたのは「攻撃的」(t=-1.956,p<.10)であった。

Table 1 重回帰分析結果

	自己決断力	親への依存	展望拡散	反抗期心理	親への服従
D 抑うつ性大	.143	-.173	.358**	-.082	-.049
C 気分変化大	-.116	-.028	-.141	-.026	.126
I 劣等感大	-.505****	.162	.145	.107	.168
N 神経質	-.010	.164	.223 <sup>+</sup>	-.035	.260*
O 主観的	-.021	.019	-.262**	.151	.125
C <sub>o</sub> 非協調的	-.223**	-.214*	.106	.001	.021
A <sub>g</sub> 攻撃的	.182*	.013	.028	.293***	-.178 <sup>+</sup>
G 活動的	.158 <sup>+</sup>	.107	-.063	-.291***	.136
R のんき	.017	.213 <sup>+</sup>	-.019	.225*	-.233*
T 思考的外向	-.226*	-.112	.133	.012	.178
A 支配性大	-.021	-.122	-.050	.025	.034
S 社会的外向	-.022	-.216 <sup>+</sup>	-.114	-.035	-.016
重相関係数	.686****	.347 <sup>+</sup>	.584****	.482****	.494****
決定係数	.470	.121	.341	.232	.244

+…10%水準 \*…5%水準 \*\*…1%水準 \*\*\*…0.5%水準 \*\*\*\*…0.1%水準で有意

#### IV. 考察

5つの目的変数ごと、順次、検討していく。

##### 1. 「自己決断力」

「劣等感」が弱いこと、「協調的」であること、「攻撃的」で「活動的」、そして「思考的内向」であることが「自己決断力」を支える結果となった。

「劣等感」の弱さは、社会適応の良好さを示す指標である。また、下位尺度の「攻撃的」について、辻岡(2000)は、「愛想の悪いことを表し、気が短い、正しいと思うことは人にかまわず実行する、人の意見を聞かないなど攻撃的な性質。この性格は情緒不安定(D・C・I・N)と結合すると社会的不適応を起こす。一方情緒安定と結合すると社会的にも活躍する社会的活動性となる。」(p.7)と述べている。本研究は、社会的活動性と解釈できる結果を示した。「思考的内向」は、熟慮的、自己洞察的な思考形態を意味する。

「自己決断力」は、社会適応がよく、活動的、他者との協調性もあるとき、衝動的にはなく、十分によく考えられるときに発揮されるものと考えられる。決して独りよがりになされるものではないと思われる。あるいは、劣等感の弱さに起因しているため、他者との相対的な比較をしなくなったときに、自己決断力が発揮されるとも考えられる。

## 2. 「親への依存」

この因子は、重相関係数が有意傾向にとどまった。また、同様に標準偏回帰係数も有意傾向のものが含まれるため、留保付きの解釈と考えてもらいたい。

社会性の低下、協調性がある、気軽に対人接触できることが、親に依存する要因となっている。

すなわち、親との関係は良好であり、それほど深刻ではないが、対人接触を避けたいときに親に依存するという行動に出るのではないだろうか。また、親に依存するためには、日頃より、親との関係を良好にしておくことが重要な要素になるものと思われる。

## 3. 「時間的展望の拡散」

抑うつ感が強く、神経質になっており、物事を客観的に見ることができるときに、将来に対する不安が喚起される。客観的な視点があるということが、将来展望への不安を駆り立てる原因となっているものと思われる。

## 4. 「反抗期心理」

活動性が低下しているが、攻撃的というよりは、「愛想」(辻岡、2000)が悪く、衝動的な気分になっている、ということが反抗的な態度の原因となっている。

第2反抗期は、自己確立のために喚起される大人社会や権威に対する反抗心と従来いわれてきている。しかし、本研究の結果は、思うように活動することができず、気分がイライラしているときに衝動的に人に当たってしまうという内容となった。心理的に自立するためというより、その場しのぎの気分解消のためになされているものかもしれない。青年期心性の変化を示すものと思われるが、男性との比較を行っていないため、女性特有の現象か否かは確定できない。

## 5. 「自信の欠如による親への服従」

親に依存することと、服従することでは大分異なる要因から構成されている。この「親への服従」因子では、神経質さ、攻撃性の低さ、そして熟慮さが予測因となった。特に、「のんき」は「親への依存」因子では正の予測因であるのに対し、この「親への服従」因子では負の予測因となった。同様に、説明変数「非協調的」因子は、「親への依存」では、協調的な関係にあるときに依存するという結果を示したが、「親への服従」因子では、有意な説明変数とはならなかった。

衝動的で協調的なきは親に依存するが、熟慮しすぎ神経質になり、活力が低下しているときに親へ服従してしまう原因となるものと思われる。

## 6. まとめ

独立意識尺度の因子分析の結果は、概ね、親との関係を示す因子と同一性形成に関係する因子とに分かれている。親との関係を示す因子として、「自己決断力」、「親への依存」、「親への服従」が挙げられ、同一性形成を示す因子は、重複するが「自己決断力」、「展望拡散」、「反抗期心理」となる。依存から自立を目指す従来の心理発達過程から考えれば、「自己決断力」因子は、社会適応の良好さを示す性格特性が予測因となり、「親への依存」因子や「親への服従」因子は、不適応状態を示す性格特性がその予測因になるものと考えられる。

しかし、本研究の結果は、「親への服従」因子では、内的不適応状態を示す性格特性がその予測因となっているものの、「親への依存」因子では、必ずしも不適応状態を示す性格特性がその予測因となっているわけではなかった。

「親への依存」因子の予測因となった「非協調的」は、「自己決断力」の予測因ともなっている。親に依存する中で、自己決断力を増していきながら心理的自立を目指すことを示していることが推測される。男性との比較を行っていないため、女性特有の独立意識のあり方とは断言できないが、他者から分離した形で自律的に自立を目指す独立意識のあり方ではないことが考えられる。相互協調的な対人関係を維持しながらも自律的な行動がとれることを目指した独立意識ではないだろうか。相互協調的な故に、かなり熟慮した上で自己決断をするという、ある意味、単純ではない複雑な独立意識があるように思われる。

同一性関連の因子では、「自己決断力」因子は、「非協調的」因子が負の予測因となっており、他者から分離した形で「自己決断」しているのではないことを示している。「展望拡散」因子では、内的不適応状態で冷静さがあると将来への不安が高まるという従来の指摘と一致する結果と思われる。しかし、「反抗期心理」の予測因となった性格特性からは、気分が沈んでいるときに衝動的に攻撃性を発揮しているという、自立への渴望といった従来の知見からかけ離れた性格特性であった。ただ、このことは、親との依存関係があるために為されることなのかもしれないし、他者との関係を重視しながら自己決断するため、他者への配慮がストレスとして感じられたときに起こる現象なのかもしれない。

### <引用文献>

伊藤美奈子 1992 自己受容と性格特性の関連についての一考察 心理学研究, 63, 205-208.

加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.

桑原知子 1990 青年期の女性の自己同一性 氏原寛・東山弘子・岡田康伸(共編)現代青年心理学—男の立場と女の状況— 培風館 55-74

三枚奈穂 1998 成人女性における自我同一性の感覚について—相互協調的・相互独立的自己感との関連から— 教育心理学研究, 46, 229-239.

三田英二 2003 独立意識からみた女性の自己の発達 青年心理学研究, 15, 1-15.

高橋恵子・柏木恵子 1995 発達心理学とフェミニズム 柏木恵子・高橋恵子（編著）発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房 1-16

田端純一郎 1980 簡易尺度による自我同一性の研究－青年期の性差、女性の特質を中心に－臨床教育心理学研究, 6, 12-16.

辻岡美延 2000 新性格検査法－YG性格検査応用・研究手引－ 日本心理テスト研究所

牛島義友他（編）1978 教育心理学新辞典 金子書房

山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

山本里花 1988 女子学生の自我同一性に関する研究－自我の二指向性の観点から－ 教育心理学研究, 36, 238-248.

(2004年10月28日受理)